

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02659

研究課題名(和文)教師の「第3教育言語」の分析を通じた図画工作・美術科授業改善システムの構築

研究課題名(英文) Practical research on speech by teachers during classes on arts and crafts and art

研究代表者

大泉 義一 (Oizumi, Yoshiichi)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：90374751

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：我国の授業研究が海外で高い評価を受けるなど注目されている一方、美術科教育における授業研究に関する議論や成果の共有は少ない状況にある。本研究ではその打開のために、教師の発話である「第3教育言語」に注目した。その発話とは「子どもと同等の立場、あるいは逆転的な立場に基づく発話」であり、話者である教師の感情的態度が伴うことで、子どもの表現をさらに能動的なものへと強化する役割を持つ。したがって、そこには話者である教師の子ども観・教育観が反映しており、図画工作・美術科の授業の特性を指し示していると考えられることから、その分析を通じた授業研究プログラムを開発し、アクションリサーチを通して妥当性を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、以下の学術的意義や社会的意義を有する。

1)図画工作・美術科の授業研究方法論への具体的寄与：本研究では、具体的な授業研究プログラムを開発し、教育現場への適用を行うことで、研究成果の具体的還元を図っている。2)教師の子ども観・教育観と連動した授業改善の実現：第3教育言語には、機能的な側面のみならず、話者である教師の感情的態度を包含している。それを対象に分析することは、図画工作・美術科の学習指導の根底にある教師が無自覚な子ども観・教育観の省察をふまえた授業改善を可能にするという新規性を有している。

研究成果の概要(英文)：The importance of Lesson Study in Japan is being questioned once again, as it has received high praise overseas. On the other hand, it has been pointed out that there is little discussion and sharing of results regarding lesson study in art education research. In order to overcome this problem, this research focused on the "Third Language of Education", which was discovered from the analysis of teachers' utterances in arts and crafts classes. The utterance is "an utterance based on the same position as the child, or a reverse position", and is accompanied by the emotional attitude of the teacher, who is the speaker, and strengthens the child's plastic expression to a more active one. have a role. Therefore, since the third educational language reflects the teacher's views on children and education, we have developed a lesson study program based on this reflection.

研究分野：教科教育学(美術教育)

キーワード：第3教育言語 授業研究 発話 図画工作科 美術科

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の学術的背景, 研究課題の核心をなす学術的「問い」

授業研究の重要性

我国の「授業研究(Lesson Study)」は、海外において高い評価を受け注目されている。また国内においては学習指導要領改訂に際して「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善, すなわち「アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善」が求められているように、授業研究の重要性があらためて問われている。

その一方で、美術科教育研究においては、理論的研究に対して実践的研究に関する議論や成果の共有が少ないことが、学界・教育現場双方において指摘されて久しい¹⁾。すなわち、実践的研究の範疇に含まれる授業研究は、「対象にする研究領域は拡大している」ものの、「全体としてはまだまだ授業研究に関する知見が共有されていない状況」にある²⁾。

教師の発話に関する研究

研究代表者は、上記状況を克服するために、図画工作・美術科の授業における教師の発話を分析対象にした研究(以降「発話研究」と記す)に取り組んできた。この研究においては、山下政俊による以下の発話分類にしたがって図画工作・美術科の授業における教師の発話様態を分析した。

- ・ **第1教育言語** ... 授業過程で必要となる子どもたちの学びと彼らとのコミュニケーションを直接リードする言葉(「～しなさい」等の指示, 説明等)
- ・ **第2教育言語** ... 第1教育言語によってもたらされた子どもたちの学びのプロセスや成果をフォローし促進する言葉(「～がよくできたね」等の評価言等)

その結果、第2教育言語が、子どもの活動を促進する役割を果たしていることを確認すると同時に、新たな役割・意味を有する以下の言葉の存在を見出し、規定するに至った³⁾。

- ・ **第3教育言語** ... 子どもと同等の立場, あるいは逆転的な立場に基づく発話(「ああ」「へえ」「どうやったの、これ」等の感嘆詞, 純粋な質問等)

この第3教育言語は、第2教育言語と同様、子どもの活動を促進する役割を持つと同時に、話者である教師の情感的態度が伴うことによって、子どもの造形表現をさらに能動的なものへと強化する役割を持っている。さらに無自覚的な周辺言語を含むこの発話の根底には、話者である教師の子ども観・教育観が反映していることを確認した(図1)。

本研究の学術的「問い」

上掲した発話構造は、子どもの造形表現を対象にする図画工作・美術科の学習指導の根底にある教師の子ども観(子どもとはどのような存在か?), 教育観(教育とはどのような営みか?)を顕在化させるものである。

山岡政紀は人間の発話を、J.R. サールによる発話行為(Speech Act)と、M. ハリデーによる発話機能(Speech Function)という二つの概念から構造化している⁴⁾。発話行為とは、話者の目的や意図の側から発話を解釈する概念であり、発話機能とは、話者と聴者によって共有された発話の働きを解釈する概念である。したがって発話行為は独話(Monologue)を考慮に入れるが、発話機能では会話(Conversation)のみを扱う。これまでの授業研究における発話分析は、授業が目的的な営みであるがゆえに、その多くは山岡の言う発話機能が着目されてきた。対して、子どもの造形表現をめぐって発せられる教師の「あー, なるほど!」という第3教育言語は、聴者である子どもとの間でその機能が共有されるといっても、子どもの表現に回答した話者である教師の独話であり、自己表出としての意味合いが強い。つまりこの発話は、発話機能というよりも発話行為を指していることになる。このように、第3教育言語を対象にすることにより、教師の子ども観・教育観を含めた分析が可能になると考えられる。

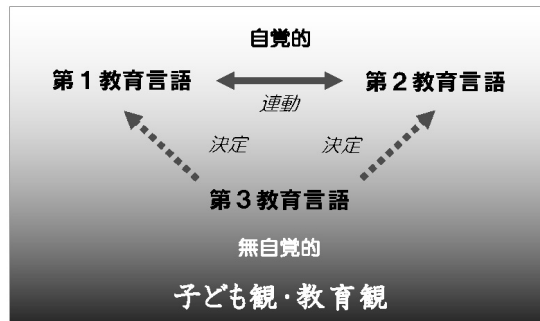


図1 教師の発話構造

2. 研究の目的

本研究の目的

上記学術的「問い」に基づき、本研究の目的を以下のように設定する。

図画工作・美術科の授業における教師の第3教育言語の分析を通して、子ども観・教育観の省察をふまえた授業改善システムを構築し、それを教育現場において活用するための授業研究プログラムを開発する。

本研究の学術的独自性と創造性

上記の目的達成には、以下の独自性・創造性を有する。

- 1) 図画工作・美術科の授業研究方法論への具体的寄与：本研究では、具体的な授業研究プログラムを開発し、教育現場への適用を行うことで、研究成果の具体的還元を図る。
- 2) 教師の子ども観・教育観と連動した授業改善の実現：上述した通り、第3教育言語には、機能的な側面のみならず、話者である教師の感情的態度を包含している。それを対象に分析することは、図画工作・美術科の学習指導の根底にある教師が無自覚な子ども観・教育観の省察をふまえた授業改善を可能にするという新規性を有している。

3. 研究の方法

【Step 1】 教育現場における授業研究の実施状況把握と課題の明確化

- ・横浜市、川崎市、神奈川県、東京都等の教育現場で行われている授業研究を視察（研究協力者に依頼）し、実施上の問題を確認することで本研究の課題を明確化する。

【Step 2】 授業研究方法論、教師の発話に関する文献研究を通じた理論構築

- ・図画工作・美術科をはじめ各教科の授業研究に関する方法論、ならびにフェルディナン・ド・ソシュールや山岡政紀などの言語学、さらには吉本隆明の芸術言語論等に関する知見などから、本研究の理論枠組みを構築する。

【Step 3】 「発話分析指標」の作成

- ・【Step 2】で構築した理論枠組み、これまでの発話研究の知見を基に、研究協力者の授業実践における発話を、その機能面ならびに情感面から分類・整理し、仮の「発話分析指標」を作成する。その手順は以下を想定している。
 - 1) 授業者の発話を音声レコーダーとピンマイクで記録するとともにビデオカメラで動画記録を行い、音声再生ソフトを通して音質の調整と解析を行い、先の動画記録と照らし合わせながら筆記記録に変換する。あわせて授業者に対するインタビューを実施する。
 - 2) 収集した発話データの分類・整理を行い、仮の「発話分析指標」を作成する。作成過程においては研究協力者に意見を求め、実践的妥当性を検討する。

【Step 4】 授業実践への「発話分析指標」の適用と妥当性の検証・改善

- ・作成した仮の「発話分析指標」を、【Step 3】の研究協力者とは別の研究協力者による授業実践に適用し、その妥当性を検証し、改善を図る。

【Step 5】 「授業改善システム」の構築と試行・改善

- ・「発話分析指標」による「授業改善システム」を構想する。
- ・研究協力者の意見を聴取しつつ、教育現場との協働的なシステム開発に取り組む。
- ・開発したシステムを研究協力者の授業実践に試行し、改善を図る。

【Step 6】 授業研究会への「授業改善システム」の適用と効果検証

- ・研究協力者が関わる授業研究会において、開発したシステムを適用した「授業研究プログラム」を開発・実施し、授業者ならびに参加者への質問紙調査を通してその効果を検証する。

【Step 7】 研究のまとめ・成果公開

- ・シンポジウムを開催し、本研究の成果を公開する。さらに報告書の発行および単行本の刊行、さらには研究代表者の研究室ホームページで研究成果を公開する。

4. 研究成果

(1) 概観

本研究は、採択前より取り組んできている。その研究成果を含めた概観を示す⁵⁾。

「第3教育言語」の発見：美術科の授業を構成する「第3教育言語」への着目（2010）

図画工作・美術科の授業における教師の発話の様態を分析し、その構造や特性を実証的に明らかにした。1回目の授業研究を通して、第2教育言語による発話が、子どもの表現活動をより促進する役割を果たしていることを確認するとともに、「子どもと同等の立場、あるいは逆転的な立場に基づく発話」の存在も明らかにし「第3教育言語」と規定した。2回目の授業研究を通して、第3教育言語が子どもの表現活動をさらに能動的なものへと強化する役割を有するものであることを確認した。対象授業の実践者は、教職歴20年以上と教職歴10年前後の教師であったが、発話の様態は教職キャリアによって異なるとも考えられるので、この観点から対象を広げ検討することの必要性が見出された。

「第3教育言語」と教職キャリア：教職キャリアと「第3教育言語」の関係から（2011）

教師の発話の様態を教職キャリアとの関係から分析することを通して、その構造や特性を明らかにした。キャリアの異なる授業者が実践する同一題材の授業を比較分析した結果、第3教育言語が授業者の感情的態度の表現・表出によるものであることを明らかにした。そしてその発話の際に生起している周辺言語の重要性を提起し、さらに意思決定場面における授業者の「許容」的態度が、図画工作・美術科の授業に特有のものである可能性を提示した。本研究では小学校図画工作科の授業を対象としたので、第3教育言語の存在を美術科教育における授業の特色として論ずるためには、中学校美術科の授業における検証を行うことが必要とされた。

「第3教育言語」と美術教師：中学校美術科の授業分析と美術教師論（2012）

中学校美術科の授業実践に見られる教師の発話から、第3教育言語の役割について精査を行った結果、第3教育言語が「周辺言語」や「沈黙」による教師の感情表出の役割を担うことで、第1教育言語による指示的内容を子どもが受容する土壌を形成している可能性が見出され

た。さらに当該授業に特有であり意図的な発話である「皮肉・irony」が、ミーハンの言う教室特有の会話構造であるIRE連鎖から脱却し、子どもの主体性の発揮を促す役割を持つことが、発話者である教師の教育信念を浮き彫りになることを明らかにした。ただし、権威的コミュニケーションからの脱却を志向するそうした発話様態は、学校教育課程外の教育実践には見られないのか確認する必要があると考えられた。

「第3教育言語」と実践者：深沢アート研究所「こども造形教室」と図画工作・美術科の授業の比較から(2013)

学校教育課程外の実践における実践者の発話様態を分析し、その構造や特性を実証的に明らかにした結果、第3教育言語の分布から、「敬体と常体の使い分け」「自主性と主体性の要求」「失敗の推奨」という特有の発話様態が明らかになった。これらの発話様態から、図画工作・美術科の授業実践における子どもの日常性とワークショップの非日常とを結びことの有効性を提起し、それを実現するためには実践者が「表現者にして教師である」ことが重要であることを見出した。本研究の知見の教育実践への還元の方策を検討することが課題となった。

「第3教育言語」の教員研修への活用：教員免許更新講習「図画工作・美術科の授業論」のプログラム開発とその実践(2017)

これまでの知見から教員免許更新講習のプログラムを開発・実践し、発話研究の成果を教育実践に還元する方策について検討した結果、受講者にもたらされた効果として、授業実践のリフレクション、授業に対する見方・考え方の拡張、研修の機会における活用、授業研究方法の習得、学びの実証性を確認した。さらに第3教育言語を教科性と関連させて考察するために、全教科を担当する小学校の教師が実践する図画工作科と他教科の授業実践とを比較分析する必要があることが課題となった。

「第3教育言語」と教科特性：図画工作科、算数科、社会科の授業比較分析から(2018)

全科担任教師が実践する図画工作科、算数科、社会科の一単位時間の授業で発せられる授業者の発話を比較分析することにより、図画工作科の授業の特性について検討した。第3教育言語を中心とした発話の出現様態、特徴的な発話のエピソード分析、さらにはテキストマイニング分析を通して、子どもの学習活動に対する授業者の関心のあり様、授業における子どもの主体性と教師の意図性との緊密な関係性が、図画工作科の授業の特性であることを見出した。学習者の発達段階に応じた教師の発話の様相の確認が必要であることが明らかになった。

「第3教育言語」と学校種：小学校、中学校、高等学校の授業比較分析から(2019)

異なる学校種段階の授業における教師の発話を比較分析することを通して、図画工作・美術科の授業の特性を実証的に明らかにした。学齢が上がるにつれ、授業で扱う概念が抽象的且つ高度になるに伴い、小学校対象授業では子どもの表したいことに応じながらも、具体的な材料・用具と関連させた教師の発話が多く見られること、中学校対象授業では造形的な視点に着目させた生徒の問題解決を促す教師の発話が多く見られること、高等学校対象授業では、青年中期にある子どもたちの自我の模索と確立に教師が関わる際の表現を通じた対等性の重要性を見出すことができた。今後は、これまでに見出してきた知見を授業改善に生かす授業研究プログラムを開発することが課題として残された。

「第3教育言語」の授業研究への活用：教師の発話分析を通じた授業研究プログラムの構築(2022)

これまでの知見から、第3教育言語を析出する手がかりを整理し、さらにそれらが発せられる際に顕在化している教師の教育信念を導出することで、発話分析指標を仮定した。次に、その発話分析指標を援用しながら学校教育現場の教師らと発話分析とその考察を協議する発話分析研究会を試行した。さらにその試行を通して発話分析研究会の運営の改善を図ると同時に、授業研究プログラムの構築を行った。今後の課題は、構想したプログラムを学校教育現場で実践することで、研究成果の普遍化と教育現場への還元を目指すことである。

「第3教育言語」による授業研究プログラムの検証(2023)

前研究で開発した発話分析指標を用いた授業研究プログラムの汎用性と妥当性を検討した。前研究と同様に、学校教員による発話分析研究会を組織し、そこでの協議内容を対象に、以下のアクションリサーチを実施した。まず、授業者を含む3名の教員が、小学校図画工作科の授業を対象に発話分析協議に取り組んだ。同時に、前研究に参画した2名の教員が協議を観察し、そこに内在する「観」の析出を行った。以上の活動から、授業研究における「観」の意味について考察を行った結果、以下の事項が明らかになった。第一に教師の発話分析を通じた授業研究プログラムが、現場教師による授業研究の方法として汎用性を有するものであったこと、第二に、協議においては参加者らが自らの「観」をふまえた考察を交流していたこと、第三に、その交流を通して、参加者らが互いの「子ども観」を自覚することの重要性である。

(2) 授業分析のための教師の発話分析指標

第3教育言語をめぐる教師の発話に関する知見から、第3教育言語を析出する手がかりを「そのあらわれ」と「その文脈」から整理して示すとともに、第3教育言語の析出を通して明らかになると考えられる「観」を定置して「発話分析指標」を仮定し、研究の進捗を通じて明らかになった知見に基づき、更新を行った。そして最終的には、表1の指標を提示することができた。この指標は、教師の発話分析を通じた授業研究における発話分析で使用する。

(3) 教師の発話分析を通じた授業研究プログラム

本研究を通じて、学校教育現場において、教師の発話分析を通じた授業研究を実施するた

表1 発話分析指標

		第1教育言語	第2教育言語	第3教育言語
定義		授業過程で必要となる子どもたちの学びと彼らとのコミュニケーションを直接リードする言葉か？	第1教育言語によってもたらされた子どもたちの学びのプロセスや成果をフォローし促進する言葉か？	子どもと同等の立場、あるいは逆転的な立場に基づく言葉か？
折出の手がかり	そのあらわれ			周辺言語を伴っているか？
				敬体・常体等の使い分けをしているか？
				沈黙や熱心な姿勢を伴っているか？ 皮肉等の言い回しを用いているか？
	その文脈	自覚的か？		無自覚か？
				応答的か？
				探索的か？
		情感的か？ 許容的か？		
明らかに「観」		教育観	教科観	子ども観

めのプログラムを以下のように開発した。

名称 発話分析研究会

目的 授業者の発話を教育言語に分類し、その結果と根拠を交流することを通して、授業に位置付く教師の「観」について考え合う。

参加対象 図画工作・美術科の授業を担当している学校教員（小・中・高等学校教諭）

組織・事前準備

- 1) 参加人数 3～5名
- 2) 対象授業 教育言語を認知していない授業者による1単位時間以上の授業
- 3) 準備
 - ・対象授業の映像記録（俯瞰・授業者視点）
 - ・授業者ならびに授業者と対話を行う子どもの発話のトランスクリプト
 - ・発話分析指標
 - ・オンライン実施の場合は、Zoom等の設定
 - ・参加者の中から1名のファシリテーター（教育言語概念を理解している者）

実施形態

- ・対象授業の観察：実地観察と映像記録（オンライン実施の場合は、映像記録のみ）
- ・研究会の実施：対面またはオンライン

展開（120～150分間）

- 1) 発話分析
 - ・研究会実施前に、参加者は発話分析指標に基づき、対象授業の教師の発話を教育言語に分類するとともに、その分類根拠について考察する。
- 2) 研究会目的と対象授業に関する質疑応答
 - ・発話分析を通じた互いの「観」の交流が目的であることを共通理解する。
 - ・授業の目標実現度や教授スキルを対象にする研究ではないことに留意する。
- 3) 授業映像を視聴しながら協議
 - ・第3教育言語が出現したと考える箇所や気になる箇所で映像を止め、分類の根拠や解釈、気になった理由等について交流する。
 - ・ファシリテーターは、発話分析指標を援用しながら、分類の根拠にある「観」について話し合うよう促す。
 - ・提起された「観」について語り合う。
- 4) リフレクション
 - ・授業全体を通じた意見交換を行う。
 - ・教師の発話分析を通して気付いたこと、発見したこと等を交流する。
- 5) 事後
 - ・協議時間が不足した場合はアンケートを実施し、その結果を共有する。

<引用文献等>

- 1) 大泉義一「美術科教育における授業研究の現状と課題」『美術科教育における授業研究のすすめ方』2017年、p.40
- 2) 山下政俊『学びをひらく第2教育言語の力』明治図書、2003年、pp.13～24
- 3) 大泉義一「図画工作・美術科の授業における教師の発話に関する実践研究：図画工作・美術科の授業を構成する「第3教育言語」への着目」『美術教育学第32号』、2011年、pp.69～83
- 4) 山岡政紀『発話機能論』くろしお出版、2008年、pp.31～34
- 5) 下記著書の内容から抜粋・整理したものである。
大泉義一「図画工作・美術科の授業研究：教師の発話に関する研究をめぐって」美術科教育学会編『私の研究技法（美術科教育学会叢書第3号）』学術研究出版、2022年、pp.126-136

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 大泉義一, 永縄啓太	4. 巻 44
2. 論文標題 図画工作・美術科の授業における教師の発話に関する実践研究・ : 教師の「子ども観」をふまえた授業研究の提案	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 美術教育学	6. 最初と最後の頁 51-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大泉義一	4. 巻 43
2. 論文標題 図画工作・美術科の授業における教師の発話に関する実践研究・ : 教師の発話分析を通じた授業研究プログラムの構想	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 美術教育学	6. 最初と最後の頁 51-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大泉義一	4. 巻 No. 936
2. 論文標題 観点別学習状況の評価と個人内評価	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『教育美術』	6. 最初と最後の頁 16-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大泉義一	4. 巻 No. 939
2. 論文標題 オンラインでオフラインを想像する	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『教育美術』	6. 最初と最後の頁 32-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大泉義一	4. 巻 942
2. 論文標題 早稲田大学造形教育ゼミナール「オンラインワークショップ『らくがき美術館』ができるまで	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『教育美術』	6. 最初と最後の頁 32-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大泉義一	4. 巻 52
2. 論文標題 「造形ワークショップの実践を通じた子育て支援における「重層的な関係」の構築 : そごう美術館における『アートツール・キャラバン』の実践から」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『美術教育学研究』	6. 最初と最後の頁 98-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大泉義一・吉田岳雄	4. 巻 40
2. 論文標題 「図画工作・美術科の授業における教師の発話に関する実践研究・ : 小学校, 中学校, 高等学校の授業比較分析から」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『美術教育学』	6. 最初と最後の頁 65-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24455/aaej.40.0_65	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大泉義一, 吉田岳雄	4. 巻 第40号
2. 論文標題 図画工作・美術科の授業における教師の発話に関する実践研究・ : 小学校, 中学校, 高等学校の授業比較分析から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術教育学	6. 最初と最後の頁 54-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 前沢知子, 大泉義一	4. 巻 第51号
2. 論文標題 造形ワークショップの実践を通じた子育て支援における「重層的な関係」の構築：川崎市市民ミュージアムにおける「アートツール・キャラバン」の実践から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 美術教育学研究	6. 最初と最後の頁 297-304
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 2件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 大泉義一, 永縄啓太
2. 発表標題 図画工作・美術科の授業における教師の発話に関する実践研究・ : 教師の「子ども観」をふまえた授業研究の提案
3. 学会等名 美術科教育学会兵庫大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大泉義一, 永縄啓太
2. 発表標題 図画工作・美術科における教師の発話に関する実践研究 : : 教師の発話を通じた授業研究プログラムの構想
3. 学会等名 美術科教育学会東京大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大泉義一, 永縄啓太
2. 発表標題 図画工作・美術科における教師の発話に関する実践研究 : 「第3教育言語」の概念は, 授業研究に“使える”のか?
3. 学会等名 美術科教育学会千葉大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大泉義一・永縄啓太
2. 発表標題 図画工作・美術科における教師の発話に関する実践研究：「第3教育言語」の概念は、授業研究に“使える”のか？
3. 学会等名 美術科教育学会（ただし「予稿集」として発表）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大泉義一
2. 発表標題 今，求められる授業のあり方を図工・美術から考える：子供・教師・題材と授業研究
3. 学会等名 日本美術教育連盟夏期研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大泉義一
2. 発表標題 子どもの育ちにとっての図画工作：造形表現から考える幼小の接続
3. 学会等名 <育ちのための表現>シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 大泉義一ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 国立教育政策研究所	5. 総ページ数 97
3. 書名 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(小学校図画工作)』	

1. 著者名 大泉義一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 教育美術振興会	5. 総ページ数 4
3. 書名 「美術の授業を考えるために」 『教育美術 第80巻 第7号』	

1. 著者名 大泉義一編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日本文教出版	5. 総ページ数 48
3. 書名 図工・美術でゆたかな暮らし	

1. 著者名 神林 恒道、ふじえ みつる	4. 発行年 2018年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 264
3. 書名 美術教育ハンドブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>大泉義一研究室 http://www7b.biglobe.ne.jp/~oizumi-labo/ 大泉義一研究室 http://www7b.biglobe.ne.jp/~oizumi-labo/ 「子の感性高めるアート教育 家庭でできること」, 日経DUAL https://dual.nikkei.com/atcl/column/17/101900011/040900124/ 「ポストコロナの教育実践を考える」, WASEDA ONLINE (読売新聞), 2020年 https://yab.yomiuri.co.jp/adv/wol/opinion/COVID-19/20201130.php 大泉義一研究室 http://www7b.biglobe.ne.jp/~oizumi-labo/ 大泉義一研究室 http://www7b.biglobe.ne.jp/~oizumi-labo/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------